

拓桃育務班の新たな試み

—「ペアレント・トレーニング」と「交流保育」の実践—

拓桃医療療育センター 育務班 ○技術主査 川部 早江

技術主査 工藤 益子

Key words: ペアレント・トレーニング (ペアレント・プログラム), 地域の保育所との交流保育, 保護者へのアプローチ

I はじめに

当センターに入院している子どもの保護者（特に母親）は、不安や戸惑い・辛さなどを抱えているが、じっくりと話す機会を持たずに退院に至っていた。保護者の思いに寄り添い受け止め、前向きに子育てをしていけるような援助が必要と考え、昨年度より「ペアレント・トレーニング」を応用して保護者へのアプローチを実践した。

また、当センターで行っている集団保育は、発達段階が様々な子ども達の活動となるため、知的面で問題のない子ども達にとって年齢相応の経験の必要性を感じていたため、地域の保育所との交流保育を実施した。

以上の2点について、昨年度より新たに実践してきたので報告するもの。

II 活動内容

『ペアレント・トレーニング』

・平成25年度に、後天性の障がいを持った子どもの母親に対して、ペアレント・トレーニングが有効ではないかと考え実践した。入院中の3ヶ月の間に6回実施。

・今年度は、入院中の未就学児の保護者向けに「ティータイム」として計6回実施。幼児期に親元を離れて生活を送ることに對して不安を抱えている保護者が多いので、拓桃での子どもの生活の様子を伝えたり、保護者の思いを受け止める場として「ティータイム」を実施した。子どもを受け入れる土台作りとしてペアレント・トレーニングの基礎であるペアレント・プログラムの手法を応用した。

・「子どもの生活を知る」「自分を知る」「他人を知る」「子どもを知る」をキーワードに、各回テーマを決めて話し合いを行った。

『交流保育』

・年長児2名が近隣の保育所（年長児クラス）の活動に参加させてもらった。9月から11月の間に計5回、午前中の活動に参加。

III 考察

『ペアレント・トレーニング』

母親達の不安を聞き出すことは重要なステップ。子ども達の様子も細やかに伝えていくことで、職員との信頼関係が築かれ、前向きに子どもと向き合えるようになり、より良い療育へとつながった。ペアレント・トレーニングをとおして、あるがままの我が子を受け入れられることができ、自信・安心感へとつながっていった。

『交流保育』

就学を迎える前の大切な時期に、交流保育によって見えた事柄から予測される課題を前もって把握し、家族や他部署スタッフと一緒にシュミレーションすることで、児童も家族も安心して就学を迎えることができるのではないかと。

IV 結論

『ペアレント・トレーニング』

職員が子ども達と実際に関わっており、タイムリーに子どものことを伝えられることや、医療面での心配事はすぐに医療スタッフに相談できる環境にあることなど、「療育の場」である当センターならではのペアレント・トレーニングの形と言える。発達障害児に対するプログラムではあるが、どんな子どもに対しても応用可能と考えている。

『交流保育』

幼児期を当センターで過ごしている子どもたちに、センターの中だけにとどまることなく、年齢相応のあたりまえの経験・生活をさせてあげることが大切である。子どもたちの心の発達のため、また、障がい児の理解促進のためにも、早い段階から計画を立てて、来年度はもっと回数を増やし定期的に交流保育を実施していきたい。

VI 引用・参考文献

- 1) 上林靖子 (2009) 『発達障害の子の育て方が分かる！ペアレント・トレーニング』 講談社
- 2) 岩崎英巳 (2012) 『困っている子をほめて育てる ペアレント・トレーニングガイドブック-活用のポイントと実践例-』 じほう
- 3) 栗原まな (2012) 『よくわかる 子どもの高次脳機能障害』 クリエイツかもがわ
- 4) 加藤繁美 (2012) 『0歳～6歳 心の育ちと対話する保育の本』 学研
- 5) 渡部信一・本郷一夫・無藤隆 (2005) 『障害児保育』 (株)北大路書房

※参考資料

- ・家族支援研修会『ペアレント・トレーニング活用術』講師：辻井正次（中京大学発達臨床心理学教授）2013.9.4 参加
- ・院内研修『ペアレント・トレーニング』講師：辻井正次（中京大学発達臨床心理学教授）2014.2.25 当センター主催